

序文 ―イデオロギー・コンプレックスを超えて

私はもともと文章を書くことが得意ではなかった。いや、率直に言えば、今もあまり好きではない。

中学生の頃、ドルトン・トランボの反戦小説『ジョニーは戦場へ行った』を、夏休みの課題として渋々手に取った。内容をろくに理解しないまま、解説書をなぞるように感想文をまとめたところ、なぜか学校で表彰され、全校生徒の前に立たされた。人前で称えられるはずのその瞬間、私は「自分の嘘を見透かされているのではないか」という後ろめたさに苛まれ、顔を赤らめたまま壇上に立っていた。――表現に対する苦手意識と、他者の視線に対する過剰な羞恥心は、すでにこの頃から私の内に根を下ろしていたように思う。

一九八〇年代の思想的風景

本書をまとめる契機となったのは、一九八七年の秋、私が二十代半ばの頃に遡る。

当時の日本は、経済的にはバブル景気の前夜にありながら、思想的には長い漂流のただ中にあった。六〇年安保闘争、七〇年全共闘運動を経て、戦後左翼の理論的基盤はすでに崩壊の兆しを見せ、マルクス主義は「大きな物語」としての説得力を急速に失いつつあった。冷戦構造は依然として存続し、米ソの対立が世界の秩序

を二分していた。だが、その緊張の下で、既成のイデオロギーもまた疲弊していた時代である。

私は親元を離れ、清掃用品のレンタル会社で働いていた。ある日、職場の先輩に誘われ、左翼系の政治集会へ出かけた。まるで休日の買い物に行くような気軽さで、似合いもしないアイビールック姿のまま足を運んだことを覚えている。壇上の演説者たちは熱に浮かされたように語っていたが、私はその内容をほとんど理解できず、ただ時間だけが過ぎていった。――思えば、あの瞬間こそ、私が初めて「言葉と現実の乖離」に直面した時だったのかもしれない。思想が理念として自足し、現実との接点を見失いつつあった時代の空気を、私はまだ若い身体で吸い込んでいた。

「アジト」としての空間

その後、私は「アジト」と呼ばれるマンションの一室で行われる学習会に顔を出すようになった。理論よりも、人々の間に流れる連帯の空気に惹かれていたのだと思う。だが、ある朝、思いも寄らぬ出来事が起こる。

突然、ドアを激しく叩く音が響き、私服警官五名（うち女性一名）が部屋に雪崩れ込んできた。彼らは令状を突きつけ、容疑をまくしたてながら室内を荒々しく物色し、身体検査まで強要した。靴箱の靴はすべて押収され、部屋は混乱に包まれた。

翌日の新聞で、私の賃貸アパートが「隠しアジト」として家宅捜索を受けたことを知ったとき、私は自らが

社会の「表層」から切り離されたことを痛感した。幼い頃から「警察の世話にだけはなるな」と言われて育った私にとって、その事件は倫理的座標を根底から揺るがす体験であった。以後、私はまるで羅針盤を失った船のように、進むべき方向もわからぬまま彷徨うことになる。

千葉で行われた空港建設反対集会に参加する際、公安警察の「面割り」から逃れるため帽子とサングラス、マスクを着けて電車に乗り込むと、乗客からは好奇と警戒が入り混じった視線を浴びた。そこに感じた疎外感、単なる社会的孤立ではなく、「自己とは何か」という根源的な問いとして私の内に沈潜していった。

「長征」との邂逅——思想の回路を開く

そんな折、仲間の薦めで手に取ったのが、岡本隆三著『長征』である。

一九三四年から三六年にかけて、中国共産党（紅軍）が蒋介石率いる国民党軍の包囲を突破し、一万二千里に及ぶ行軍を完遂した記録——それが「長征」であった。出発時八万人を超えた兵士は死傷・脱落を経て数千人にまで減少した。それでもなお、彼らは歩みを止めず、理想を手放さなかった。

私が感動したのは、イデオロギーとしての共産主義ではなく、絶望の只中にあっても歩み続けた人間の「意志」の姿である。思想が抽象的な体系としてではなく、行動と信念を媒介する“生の運動”として立ち上がる瞬間を、私はその物語の中に見た。おそらくあのとき、私の中で思想は初めて「生きること」そのものと結びついた

のだろう。

「書く」ことの実践

以後、私は社会変革運動に身を投じ、所属していた「戦旗・共産同」の機関紙へ定期的に原稿を寄せるようになった。

とはいえ、もともと文章嫌いの私にとって、それは苦行に等しかった。高価だったワードプロセッサを思い切って購入し、ブラインドタッチを身につけるまで夜を徹して練習した。難解な哲学書を繰り返し読み返しては挫折し、それでも頁を開き続けた。やがて、マルクスの『ドイツ・イデオロギー』に取り組む過程で廣松渉の哲学に出会い、「物象化」や「関係の論理」といった概念を通して、自らの経験を照射するようになった。

書くことは、自己を社会へ媒介する行為であると同時に、自己の内なるイデオロギーと向き合う行為でもあった。その格闘の中で、私は次第に「イデオロギー・コンプレックス」とも言うべき思考の呪縛を脱していったのだと思う。

本書の構成と意図

本書には、約十年間にわたり機関紙へ投稿した原稿を三つのカテゴリーに再編集して収めた。

第一部「イデオロギー編」では、歴史哲学・生態学・社会学・民俗学・ジェンダー論など十五篇を収録している。特にマルクス『ドイツ・イデオロギー』ノートの読解を通じて、廣松渉の哲学に接近していった過程を辿ることができる。

第二部「文芸批評（リテラリー・クリティシズム）」では、映画や漫画、小説といった文化表現を通じて、思想がどのように日常生活の中へ浸透し、また変質していくかを考察した。

第三部「プラクティス」では、職場や組織活動の中で生じた矛盾、葛藤、そして自己の感情の揺らぎを十五篇にまとめている。現実の只中に思想を据え直す試みの記録である。

これらの原稿の大半は、三十年近くフロッピーディスクの中に眠っていた。今回、こうして日の目を見るに至ったのは、同志・石井氏の多大な尽力によるものである。文章校正からイラスト制作、解題に至るまで、多方面にわたる支援をいただいた。この場を借りて、心より深く感謝申し上げます。

二〇二五年十二月

田畑久志